口上書之覚

2620

114
A3117
1

大正十一年四月
大隈侯爵記寄贈

早稲田大学図書

一

下心言上書ヲ以テ奉願上候

志願之儀ハ他之事件ニハ無之多年各國之船高ト交易ヲ為スコト久シ然ル処各國之高法ヲ略〻察スルニサホド若心スルニ不足依之同志之者ト大評仕り別ニ奉啓裏候(ドモ)

不取敢実効ヲ養セザルトキハ盡忠之表不相顕候間(和)速ニ実効ヲ奉養度ト奉冊心候期ニテ

御國之光耀ヲ海外ニ布示セントト必定ト奉存候依リテ
左之通リ

一 先當分定海之地ニ到リ彼之地ニヲイテ
御國之通高舘ヲ開キ諸事
御國之振合ヲ以テ舘ヲ設ケ度候事

一 通用金銀ニテハ御渡シ下ゲニ不及通舘造立日費トウ不殘
大政官紙幣ニテ相賄候事

一 御國物産品買上ゲ之儀ハ紙幣ヲ以テシ彼ノ地ニヲイテ賣捌
キハ一切洋銀ニ耳ヲ以テ取引勿論之事

一 彼ヨリ得ル処之メキシコドルラル又ハポンド シルリング ペンス
悉トヲ專一トシ
天朝之庫倉ニ充滿致度事

右大凡之通りニ御座候然ル処差當り紙幣凡五十万両
外ニ蒸氣船一双御渡下ゲ被　下置候ハ此度実効相
立可申尤モ私後来船高ヲ以テ渡世仕り候ハ各國商法之
儀ハ過半心得居候間何卒御賢察之上御採用伏ミテ奉願上
候尚書外ハ吾ヲ以テ奉申上候以上

明治紀元己正月

大坂立賣堀四丁目
三原屋
喜石衛門

奉啓表

吉村上總大掾

日下梅村春藏

414
A3117
2

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

抑各國之儀ハ國產製造ヲ以テ主トスト雖ドモ地性之異ナル有
テ或ハ彼レニ有テ是レニナシ各其用ヲ成サンガ為メ普通之
高法ヲ以テ衆邦ニ通ス故ニ高法ヲ以テ專一トス就中
皇國ハ是迄鎖國ニシテ產品國中ニアマリ有ラ百品其用ニ足リ
國内之便用一モ欠クコトナシ近代各國ト普通開港ニ相成候
テヨリ高道大ニ行ハレ実ニ不可謂之世変ニ立至リ候隨テ

御変革之後百事大ニ備リ一モ洩レシ所ナシ然ドモ
御國之高法ヲ以テ各國之高法ニ適スレバ彼レニ利ヲ得テ
御國ハマサニ利ヲ失ハントス如何トナレハ外人ハ諸洲之産ヲ舶
来シテ
御國之産ト交易ヲ為ス彼レヨリ来ルニ而ニシテ彼レニ行クコトナ
シシカノミナラス航海其ヲ得テ宇内隣之如クナストキハ

御國之産ヲ以テ不可適ズトス或浪華之一高人多年
彼ノ舶高ト交易ヲナスコト久シ初メハ利潤アレドモ近来大ニ損
亡ス依テ彼ノ舶高ニ附テ説ヲ聞クニ日域ハ姦高多クシテ其
自益ヲ欲シテ國益ヲ不知也其貿易スル所コトニ品物之價大
ニ不同アリ是ヲ以テ坎ノ國ニ舶来スルトキハ利潤大ニ得ヤスシ
又或舶高之曰萬國之内是産之盛ナルト日域ニ類ハ之

國ナシ近年開港之國ナレハ利潤太ダ得ヤスシ又曰金穀
最トモ他國ヨリハ上品トスト云〻依之同志之輩竊ニ按スル
金穀塩油ハ
御國之必用ニシテ倉庫ニ不滿ハ民命之關係ハ勿論モシ
國家ニ事有ラントスルトキハ何以テカ是レニ備エン哉尚ヲ即今
天下之大事件ハ通商法ニ有ヨリテ必急務トスル処ハ大通
高館ヲ設ケ彼レニ適スル之高道ヲ三土産造殖之基ヒヲ開
キ國土疲弊ニ不至ヨウノ良策ヲ立ツルニ有リト奉存候依之
同志〻數十輩左之件々奉言上候
一大通高館ヲ設ケ各國ト通高ハ此館ニヲイテ決ス尤國中ニ
五ケ所ニ定ム
一浪華　一神戸　一長崎

一横濱　一　箱館

其向寄ヲ分テ國產運輸ヲ成サシム民間製造之產品
タトヘハ是迄百金之通價ハ百九金ヲ以テアタヘ（然シ）民間
之賣買ヨリハ價ヲ增シ唯國產充分ニ高舘ニ集マル以テ能
トス但シ否有リ

一會計局之紙幣金札多分製造有テ一通高舘ニライ
テ凡當分五百万鎰ヲブク尤國内產品ハ右紙幣ヲ以テ買上
其庫藏ニ充滿セシメ候ヨウ有之度事

一府縣ニヲイテ右紙幣ー農高民ヘ貸渡シ民間大融通ヲナサシ
メ或ハ山林荒野ヲ拓シ土產充分ニ引起度事

一諸藩ニヲイテ切手ト唱ヘ候紙幣其宜ニ應シ製造ナシ以下
右ニ同シ但シ次條ニ否有リ

一會計之紙幣ハ天下普通ニシテ藩造之紙幣ハ會計之紙幣ヲ以テ引替有ラ哀筭ト又

一金穀塩油之類ハ高舘ヘ運輸致ス間敷事

一彼ヨリ得ル処之洋銀ハ朝廷之倉庫ニ令満但シ軍用之器械ハ通舘ヨリ諸藩賣渡ス有之度事

一舶来之品物取扱肝煎人ヲ撰ミ其身元厚ク薄ニヨリ一舘ニヲイテ凡百人ト相定メ入札ヲ以テ高札之方ヘ落札者ヨリ高人ヘ賣買為致最ト肝煎人舶品買請之高ニ應シ前或銀トシテ凡戴判ト相定メ高舘ヘ前入為致皆金ヲトヘ遅延ニ及ヒモ六十日ヲ定限ト又

一諸藩ニヲイテモ右ニ同シ但シ次條ニ各有リ

一五ケ所之通舘ヘヨリ相場ヨリ通ジテ不同ナカラシム

一高舘ニヨイテ國産充実之トキハ船艦ヲ以テ洋國ヘ到リテ

交易ヲ為ス

一姦高ドモ私ニ洋人ト貿易有之間敷事

右大凡之件々高舘ニ被為立置候ヘバ即チ富國強兵之基ヒ

ト奉存候方今各國之公法ハ全ク高法ヲ以テ相交リ其致ス

トコロ利ヲ以テ專一トス若シ

御國ニヨイテ各國ニ適スルノ高法不相立トキハ却テ利ヲ失フ

モ而ナラズ姦高サカシニ相起リ遂ニハ國土疲弊ニ立到ラン哉

ト奉苦心候尚書外ハ舌ヲ以テ奉言上候伏而願クハ照察

ヲタレヨ誠惶誠恐頓首百拜

明治紀元正月